

温故知新

其の六

石炭産業と国鉄

◆「黒いダイヤ」

日本のエネルギー産業の中心的な役割を担っていた石炭採掘は、この猿払村でも隆盛を極め、ピーク時の猿払村人口は一万人に手が届くほどになり、主要な産炭地域としての小石地区だけでも全人口の四分の一が暮らしていました。小石以外にも炭鉱があり、「石炭別」の集落名がその証となっています。

昭和二十五年八月に北海道石炭協会から発行された「北海道炭田誌第一号 天北炭田編」には、稚内・幌延・猿払・頓別までの広範囲にわたる天北炭田について、地形地質をはじめ、各行政区の人口や産業形態・交通状況に至るまで極めて詳細に編集され、炭質や熱量などの専門性の高い記録や、各炭鉱事業所の労働環境や住宅・厚生施設などの生活環境についても

記載されています。

漁業が栄えた知来別・浜鬼志別・浜猿払に多くの商店や娯楽施設が建ち並んだように、村の石炭産業の中心地であった小石地区もまた、あらゆる商業施設で賑わいをみせていたようです。道内をはじめ、全国から炭鉱での就労を求めて人が集まり、時には諍いや刑事事件の発生など、良くも悪くもエネルギーに満ち溢れていたのではないのでしょうか。

当時、採炭作業に従事していた方のお話では、労働組合の力も強く、就労環境の改善を求めて、小石から鬼志別まで組合旗を掲げてデモ行進をしたそうです。厳しい環境下での労働であったと思いますが、それ以上に石炭産業に携わる高いプライドを持っていたのではないのでしょうか。

小石地区の北西側はなだらかな

丘陵になっていますが、採炭のピーク時には、その丘を埋め尽くすほどに炭鉱住宅が立ち並ぶ様子が見えがえます。

この炭田誌の結びには、猿払村を含む天北炭田への大きな期待が寄せられています。

一部を原文のまま、抜粋し掲載します。

……天北炭田の埋蔵炭量は昭和七年札幌山監督局発表によれば、四万六千八百万トで、北海道の約六%を占める。然し之は當時知られて居た含炭区域のみ就いて行われた炭量計算に過ぎないから、現在判明した全炭田を含めるとすれば恐らく十億トに達するものと推定され長い生命が約束されている。……要するに、天北炭田は炭質及び交通の点に稍々難点がある

が、地域的に占める重要度は実に大きく地方開発の大なる任務を帯びると共に、安定した地質構造及び豊富な炭量を有する事が他の炭田と比較して著しく趣を異にする点である。従って之を充分に認識するならば唯單にその産する石炭が低熱炭であると言う事のみで之を放置する事なく、炭質を良く究めその利用活用を充分に図り本炭田を育成する必要がある。

◆音威子府からの延伸、開業そして全線廃止へ

猿払村からレールの軋む音が聞こえなくなつてから三十年が経ちました。

産炭地からの石炭輸送を目的に進められた北海道内の鉄道は、広大な地域に血管のように張り巡らされました。しかし、産業構造の変化と道路網の整備、鉄路の維持に多額の費用がかかるなど、次第にその姿を消していきました。

一九一四年（大正三年）に音威子府と小頓別間の延伸開業が始まり、八年後には鬼志別と稚内（南稚内）間が開業しました。この間、

路線名は「天北線」ではなく、「宗谷線」と「宗谷本線」へ交互に改称され、日本海側の「天塩線」が「宗谷本線」に編集されると同時に、「宗谷本線」から分離され「北見線」に改称されました。

そして、一九六一年（昭和三十六年）に、「北見線」から「天北線」に改称され、同年十一月には、急行「天北」が新設されました。

その後、芦野駅、小石駅、浅茅野駅、猿払駅が相次いで無人化となり、国鉄再建法の施行にともない、第二次特定地方交通線に選定され、JR北海道に承継されて僅か二年余りの一九八九年（平成元年）四月三十日をもって全線廃止となり、五月一日からバス路線に転換されました。

一九一四年の延伸以来、七十余年の歴史に幕を閉じた旧天北線は、効率や合理性だけでは判断できないほど、地域に大きな効果をもたらしました。北海道のように広い地域に住む私たちにとって、単に人の移動や物流だけではなく、様々な思いが詰まった大切な公共交通機関でした。道内の隅々まで敷設された鉄道

が、国策上止むを得ない事情があったにせよ、高度な経済成長という時代背景の中で廃止になったことには、寂しさを募らせる方も多いたのではないのでしょうか。旧鬼志別駅舎跡に建つバスターミナルには、当時の鉄道資料が多く展示されています。旧猿払小学校にも、当時の駅員制服や作業服、「ジंकロ」と呼ばれるレール補修用の工具などが保管されています。

石炭も鉄道も、村の歴史を語る上で大切な産業のひとつです。村はもうすぐ開村百年の節目を迎えます。一時代を築きながらも衰退した産業、苦しい時代を乗り越えて現在の村を支えている産業など、この百年の歴史を一つひとつ掘り起こす作業も重要なことと思われれます。



豪雪の中、進む汽車



旧天北線 鬼志別駅構内



最後の列車を送る笠井村長（広報さるふつ）



旧藤田炭鉱



丘陵に建ち並ぶ炭鉱住宅街